

## 医療届かぬアフガニスタン：空論と現実のはざままで

Between Rhetoric and Reality: The Ongoing Struggle to Access Healthcare in Afghanistan

### 概要

2014年はアフガニスタンの新たな苦難の年だ。12年に及んだ米国主導のNATO軍事介入は最終段階、4月に控えた大統領選と地方選。相当規模の国際部隊が年内に撤退することもあり、世界の注目は急速に離れつつある。アフガニスタンで依然関心を集めるのは決まって軍縮、治安権限の移譲、選挙戦だ。激化する紛争になす術のない人びとの置かれた、日々の現実には焦点が当てられることは特に少ない。実のところ、2013年は民間人の暴力被害が2001年に次いで深刻な1年だったという。

多国籍軍の撤退を前にした各国の指導者の狙いは、アフガニスタンへの国際介入の実績に具体的な外見を与えることだ。政治・軍事的もくろみに合わせてしつらえられた成功談は多い。保健医療の提供についても、2002年以降、多くの尽力と進捗がなされてきたことは疑いない。ただ、公式説明で慣例的にアフガニスタンの保健医療体制の成果が強調される一方で、未充足の医療・人道援助ニーズは顧みられずにいる。

保健医療分野の成果に関する余りにも楽観的な空論は、MSFが活動地で目にする現実とはかけ離れていることが多い。ところが、信頼のおける統計の不足が、実際のニーズの規模を俯瞰しにくくしている。人びとの医療の利用可能状況をより正確に把握するため、MSFは医療チームの活動先であるヘルマンド州、首都カブール、ホースト州、クンドゥーズ州の4病院で調査を実施。6か月余りにわたり、観察と、患者・介護者合計800人以上への聞き取りが行われ、人びとが医療を望む際の障壁をよりよく理解するための試みがなされた。

調査結果は憂慮すべきものだった。統計と個人の証言の両面から際立つのは、今も続く戦争がアフガニスタン人社会におよぼす破壊力だ。死亡率が世界でも最悪の水準の国で、紛争が遠隔地をはじめ各地の公的保健を瓦解させている。

人びとの語る体験が暴くのは民間人の戦争被害だ。地雷で吹き飛ばされたある一家は、赤ちゃんを連れて自宅から病院に向かうところだった。敵対関係にある複数の武装勢力の抗争と強要に巻き込まれた村々。屋外の戦渦を避けるため、人びとは病気やけがをした大切な人の命の峠を寄り添って夜通し見守るほかない。翌日、無事に医療施設にたどり着けることを願いながら……。

## 主な所見

### 長引く暴力と情勢不安の影響

- 調査直前の 12 ヶ月間で 4 人に 1 人（29%）が自ら暴力被害に遭うか、家族または友人が暴力の被害を受けた。
- 調査直前の 12 ヶ月間で 4 人に 1 人（23%）が、家族または友人を暴力で亡くしている。
- 死亡例を含む暴力被害の圧倒的多数（87%）が現在進行中の武力紛争を原因としていた。残る 13%は犯罪行為または、個人ないし集団間の争いによる。

### 医療を利用できないことの影響

- 調査直前の 12 ヶ月間は 5 人に 1 人（19%）が医療の不足により、家族または親しい友人を亡くしている。
- 医療の利用を妨げ、人命の喪失につながる 3 つの大きな壁は、経済的貧しさと費用の高さ（32%）物理的な遠さ（22%）、武力紛争（18%）。

### 医療を受けるまでの危険な道のり

- 保健医療施設までたどり着けても、さらにさまざまな壁を乗り越えなければならない。調査対象の半数（49%）の人が、その壁は紛争に起因すると回答している。
- 聞き取り調査時に病院に居合わせた人びとも、8 人に 1 人が直前の 12 ヶ月間に、残念ながら来院を果たせなかったことがあるという。また、ヘルマンド州とクンドゥーズ州の 5 人中 2 人が同期間に少なくとも 1 回は、何らかの理由で MSF の活動する医療施設への移動を断念ないしは大幅に遅延させられたと回答した。
- MSF の活動先病院への移動を断念または遅延させた理由の 74%が戦闘もしくは夜間の治安悪化だった。

### 距離と費用の壁

- 物理的な距離も各地の患者が保健医療施設に向かう際の高い壁となっていた。特にカブールとクンドゥーズ州の患者は、距離を最大の障壁と回答。クンドゥーズ州では聞き取り対象者の 3 分の 1 が、医療施設が遠く、救急処置のための負傷者の搬送で大いに苦労したと述べている。
- 10 人に 1 人（12%）が自動車で 2 時間以上を費やし来院しており、多くの場合、通過した道路の状況も危険だった。クンドゥーズ州では 4 人に 1 人（27%）が外傷治療センターへの重傷者の搬送に 2 時間以上を費やしていた。
- 3 人に 2 人（66%）が自身の世帯の生活水準を貧困または極貧と表現し、1 日約 1 米ドル（約 103 円）で暮らしていた。しかし、直近の病気で各世帯が支出した医療費は平均 40

米ドル（約 4000 円）で、4 世帯に 1 世帯の割合で 114 米ドル（約 1 万 2000 円）を超えていた。

- 5 人に 2 人（44%）が、直近の病気で治療を受けるために、やむなく借金か私物の売却をしていた。

### **保健医療体制の認識と利用**

- 5 人に 4 人（79%）の人が調査直前 3 ヶ月以内の病歴において最寄りの公立診療所への通院は避けていた。主な理由は、診療所スタッフ、往診、治療の有用性と質に難があると思ったからだという。

以上の所見は、非常に多くのアフガニスタン人と、彼らの経済力に応じた良質な医療援助とを隔てる壁の高さが、保健医療体制にまつわる成功談の氾濫で見えにくくなっていることの証左だ。聞き取り対象者の過半数が、情勢不安、物理的距離、高費用が相まってなかなか医療が受けられないと回答している。

国内の保健医療施設の数は一過去 10 年で相当の増加を見せているが、費用が適正で正常に機能しており、通院しやすい距離にある施設がまだまだ少ないことは人びとの話から明らかだ。保健医療施設の対象者の拡大と質の向上は、治安の劣悪な地域では特に重視されなければならない。そうした地域では、基礎・救命医療が行われていないか、法外な費用や物理的な移動の問題が壁となっている。

保健医療施設にたどり着けたとしても、その道のりは恐怖と危険に満ちている場合が多い。地雷、道路封鎖、検問、圧力、銃撃戦の飛び火を切り抜けなければならないからだ。多額の交通費と診察・薬剤・検査・入院費を賄うため、大勢の人が返済しきれないほどの借金を背負ってまされる。したがって、医療福祉無償化政策の公約どおり、公立の診療所が万人に無償の医療を保障することが肝要だ。

アフガニスタンでは武器によるけがで治療を受けた人の数が 2013 年中に 60%増加しており、激しさを増す紛争で被害を受けた人のための保健医療サービス・施設の不足が特に懸念される。なかでも、基礎医療施設と郡・州病院間の患者紹介体制の機能不全が、民間人負傷者や、分娩合併症の起きた妊婦の救命外科手術を阻む。

紛争の全陣営と、有象無象の犯罪組織が入り乱れ、医療の利用に差し障りを生じさせるような活動を今も続けている。頻繁な戦闘、武装勢力による保健医療施設の占拠、検問所での意図的な

足どめや嫌がらせ、医療用車両・医療スタッフの襲撃といったすべてのことが、医療援助の必要な傷病者を阻む、看過できない壁を作り出すのだ。

多数の保健医療施設と学校を 2014 年の選挙の有権者登録所および投票所として利用するというアフガニスタン政府の発表で、保健医療施設が医療ニーズの充足以外の目的で使用される新たな兆しが見えている。このような用途は保健医療施設が攻撃対象となるリスクを高め、医療提供のための中立的な空間という一般認識を損ない、保健医療スタッフと患者の命を危険にさらす。

紛争被害を受けた遠隔地では、住民が保健医療体制の破壊と瓦解により不当な影響を被るとともに、MSF を含む国際人道援助団体も継続的で十分な援助を情勢不安に阻まれている。そのため、特に無力な人びとは自力を頼るほかない。

質の高い援助を最も必要な地域に、より確実に届けるため、保健医療団体や人道援助団体は武力紛争の全陣営と通行に関する交渉を優先的に行う必要がある。同時に、中立で公平な援助が紛争参戦者を含む傷病者のもとに無事に届くよう、いずれの当事者もさらに多大な努力を払わなければならない。

過去 10 年、援助提供の場所と方法はあまりにも多くの場合、安定化、部隊防護、人心掌握を視野に判断され、人びとの差し迫ったニーズはなおざりにされてきた。どのような施策であっても、人道援助活動と政治・軍事的目的とを切り離して行われなければならない。

一般のアフガニスタン人の証言と、氾濫する成功談とのかい離の大きさは衝撃的だ。同国への介入を単純なサクセス・ストーリーにまとめてしまえば、現在進行中の戦争と人びとの人道援助ニーズ増加の現実が見えにくくなってしまふ恐れがある。MSF の報告が患者の体験に焦点を置くのは、彼らの窮状への対応を喚起するためだ。MSF 自体も引き続き、各活動地で質の高い無償の援助に取り組み、最も無力な人びとに手を差し伸べられるよう努めていく。

国際部隊が撤退準備を進め、援助資金提供者とメディアのアフガニスタンに対する関心が薄れゆくなか、同国の人びとに具体的な援助をもたらす活動が優先されるべきだろう。アフガニスタン国民の命を救い、苦しみを和らげるため、今こそ彼らの置かれた現実に正面から向き合わなければならない。